

衆生として生まれ

浦田晴雄上人を偲んで

今年（平成三十年）の四月上旬、四十九回目の輪番奉仕に行ってきました。浦田晴雄上人を偲びつつ、しだれ桜がまだ残っていた身延山の春、初めて参加されるという律子夫人とお檀家さん十人ほどで信仰の旅を楽しんできました。

この輪番奉仕のご案内や、日蓮聖人の教えをお檀家の皆さまにお伝えしていたのが「通力寺報」です。昭和五十九年より春秋のお彼岸とお盆の年三回発行されていたそうです。ここに晴雄上人がお書きになってこられたものを、上人一周忌の記念として律子夫人が一冊の本にまとめてくださいました。

一文ごとの構成は、ほぼ日蓮聖人のご文章（ご遺文）から始まり、それを現代語訳され、さらに加えて、ご自身の考えを述べられるかたちです。それがなんともわかりやすい文章で、ご遺文の意味合いがよく理解できるのはもちろんなのですが、教え論

す、いわゆるお説教調ではない、上人の信仰の深さからのやさしい言葉が、一語一語、まるでご自身に語られるように綴られていて、なんとも心に響いてまいります。

昨年（平成二十九年）の春のお彼岸少し前、拙寺にいらっしやいました。ご病気が見つかかり余命を覚悟され、通力寺の今後を頼みたいとお話でした。突然のことでは驚きましたが、あまりにも淡々とお話しになられるので、私自身それほど深刻さも感じずに、「ご法務はなんでもお手伝いしますのでどうか治療に専念してください」とお応えするばかりでした。それから五か月余り、八月七日にご遷化になりました。

このご本の中で「死」について何度も触れられています。先代日行上人のご遷化の折のことを「心の準備ができていませんでした。僧侶として何度も人の死に出会い、他方では病院に勤務している私が此の有様なのですから全く恥ずかしいことでした。これに比べて、日行上人の臨終は全く静かなものでした。そこには自分の生涯を精一杯に生きた人の満ち足りた安心感のようなものさえありました」とお書きになっておられますが、晴雄上人ご自身、最後にお会いした時も、呼吸はさすがに荒かったのですが、笑みを絶やさずにお檀家さんのことなどもお話しく下さいました。自らの臨終

を正面から静かに受け入れておられたお姿をここにご報告しておきます。

「私の説いた教えと戒律が、私の死後、あなたたちの師となることでしょう」とはお釈迦さまの最後の言葉です。通力寺のお檀家さんにとりまして、上人がこのご本を遺してくださったことは、なにもものにも代えがたい宝ものになることだと信じております。

後事を託された私としましては、一層の責務の重さにいささかたじろぎ気味ではありませんが、先ずは、このご本を携えて五十回目（輪番奉仕）を完遂することを当面の目標としていくしかないと考えているところです。

順孝院日綯上人の増円妙道を心よりお祈りいたします。

目次

浦田晴雄上人を偲んで	
第一章 社会と人と	9
第二章 生から死へ	35
第三章 仏性	65
第四章 お盆とお彼岸	89
第五章 日蓮聖人のお言葉より	117
第六章 断酒会の人々	169
第七章 衆生と仏	185
雑記 豆知識より	209
あとがき	